
平沢三姉妹？？いや兄妹か姉妹(きょうだい)？

雨風ライク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平沢三姉妹?? いや兄妹か姉妹?
きょうだい

【Nコード】

N5262U

【作者名】

雨風ライク

【あらすじ】

平沢兄妹? が紡ぐ物語です

初心者ですがよろしくお願いします

恋愛要素も多少含みます。

第一話？　これはホントに兄弟ですか？（前書き）

初心者な上、下手ですがそれでも良いという方は
暖かい目をお願いします

第一話？ これはホントに兄弟ですか？

少しまだ肌寒い春の時期

そうみんなが喜ぶ春休みなのだがもうじきそれは終わる

「お姉ちゃん、お兄ちゃん朝ごはんできたよー」

「わかった」

「後五分むにゃ…むにゃ…」

「だめだよ唯姉、ご飯冷めちゃうよ」

「わかったよおー蓮」

ここは平沢家

長女である平沢唯^{ひらさわゆい}、それについて

双子の平沢蓮^{ひらさわれん}、平沢憂^{ひらさわうい}二人がいる

ちなみに蓮が一応兄である

蓮は唯や憂よりも少し髪が長いが、この三人は髪型を一緒にすれば、基本的に見分けがつかない

「やっぱり憂のご飯はおいしいね」

「そうだねえ」

「えへへ／＼ありがとう／＼」

兄、姉二人の言葉に対して憂は少し頬を赤く染めてはにかみながらお礼を言った。

「そういえば、憂も蓮も桜が丘高校に入学するんだよね」

「そうだよおねえちゃん」

「共学になったから、僕もいけるしね」

唯はハッと思い出したかのように二人に問いかけた

それに対して憂と蓮は答えた

「わくいまた憂や蓮と学校に行けるよ」

そう言ってぴょんぴょん跳ねている唯を見て蓮たちは

（相変わらずだな唯ねえは）

（やっぱりかわいいなお姉ちゃん）

「だけど唯ねえ、うれしいのはいいけど今は食事中だから跳んだら駄目だよ」

「はーい」

そういつて三人は他愛のない会話をしながら、食事をすませている。
た。

「「ごちそうさま」」

「お粗末さまでした」

憂は後片付けのためにキッチンへ
唯は今日はどうか考え中

「私和ちゃんの所へいつてきます」

「どうしたの急に？」

「いやあ今日和ちゃんの所へ行くことになってたの忘れてたんだあ」

「唯ねえそれは忘れちゃ駄目だよ」

「ごめんごめん」

唯は本当に忘れていた顔で蓮としゃべっていた

「それじゃあ、行ってきましたーす」

「「いってらっしゃーい」」

唯が発発するとき、憂もキッチンから出てきて蓮と一緒に見送った

「さてこれからどうする憂？」

「お買い物に行かない？ 最近お兄ちゃん行ってないし・・・」

「別にいいぞ、それじゃあ準備するか」

「うん♪」

二人はそれぞれ準備をした。

「おまたせ」

「かわいいじゃんか憂」

「えへへ／＼」

憂の格好はシンプルだが少しおしゃれをしているため、普通にかわいい

「お兄ちゃんもかっこいいじゃん」

「ありがとな／＼」

蓮は憂にそう言われたのが、少し恥ずかしかったのか憂の頭を照れ隠しになでていた

（お兄ちゃんに撫でて貰うの久しぶりだなあ今日は良い一日になりそうだよぉ）

もうどこの恋人だよって感じにいちやついている↑兄妹ですあくまで兄妹です。大事な事なので二回言いました

憂は久しぶりに蓮に頭をなでもらい気分良くだがなでるのをやめたとき、少しさびしそうにして

二人は商店街へと出発した

「まずはどうする憂？」

「私は服屋に行きたいな。」

「わかったじゃあ行くか」

二人はまず服屋に向かうことにした。

「わあかわいい」

憂は服を見ているそれを蓮は少し離れた所から見ていた

「お兄ちゃん、これおにいちちゃんに、似合いそうじゃない？」

「ちょっと憂それ何？」

ここは女性洋服店です。となれば憂が持ってきた服はもちろん・・・

「んっ女物の服だよ♪」

やはり女物の服でした。

「いやいや僕は男だよ憂？」

「わかってるよおにいちゃん。でもきつとにあうよ」

そういうながら、迫ってくる憂。

「いゝやゝだゝ」

そんな憂から逃げることに10分弱

「しょうがないなあ、今日はあきらめるよ」

「今日は？今日はって何？」

「うんそうだよ今日はだよ」

「次があるかもしれないの？」

「ふふふ」

憂は今日はあきらめた

その後憂は2、3着買って二人は店を出た。ちなみに代金は蓮持ちでした。

二人はおなかが減ったので、どこかの店に入り

食事をした

ゲームセンター

「負けないよ」

「こっちこそ負けないよ憂」

「じゃあお兄ちゃんが負けたら、帰ったらおねえちゃんの服を・・・」

「うおおおおお」

蓮は負けまいと奮闘して辛くも勝利した

二人はその後遊びつくした後
家に帰宅した

第一話？ これはホントに兄弟ですか？（後書き）

短い下手でしたが
ごめんなさい

感想くれるとうれしいです

ではライクでしたー

第二話? 入学式にいざ出陣! (前書き)

ライクです

そういえば桜ヶ丘高校を共学設定にするの忘れてました
すみません訂正しておきます

それと『は心の中もしくは強調したいときに使います

それでは本編をどうぞ

第二話？ 入学式にいざ出陣！

この日桜ヶ丘高等学校の入学式

蓮と憂はまだ少し大きい制服に身を包んで、家を出ようとしていた

「唯ねえ、行くよ」

「うんいこっか」

三人は学校へと歩き出した

「唯姉軽音部楽しい？」

「うん楽しいよ、蓮も入るよね軽音部？」

「もちろんだよ、せっかくだし」

「だよね、蓮も楽器できるんだし」

唯はスキップをしながら歩いている。

「あはは、でもお兄ちゃん気をつけてね。いろんな意味で・・・」

「うん、わかってるよ憂・・・」

蓮の脳裏によぎるのは、去年のクリスマス

さわこに女装させられそうになったりして

危なかった蓮でした

「すればよかったのに」

「しないよ！」

三人姉妹^{きょうだい}? は話しながら学校に向かっていた

学校に着いた

「じゃあ私はここでいくよ、じゃあね蓮、憂」

「うんバイバイおねえちゃん」

「それじゃ、唯ねえ」

二人は唯と別れクラスを見に行こうとしていた

そんな二人の後ろから話しかける人が・・・

「あつ憂に蓮じゃんか」

「あつ純ちゃん」

「あっ純じゃんか」

二人に話しかけてきた人物は鈴木純二人と同じ中学で二人と新たに共学となった

桜ヶ丘高校に入学した。

以前憂と一緒に軽音部を見に行つて、軽音部はやめておこうと思つた方である

「二人とも今からクラス見に行くの？」

「そうだよ」

「純ちゃんは？」

「私も今からだよ」

「じゃあ純ちゃんも一緒に見に行く？」

そうゆう事でクラスを三人で見に行くことになった。

クラス表を見に行ったのだが、すごい人だかりができていた

「すごい人だかりだね。」

「そうだね、僕が見てくるから二人はここで待っててよ」

「うんわかった」

「任せたよ蓮」

蓮は二人にそういつて人ごみの中へと入っていった

「相変わらずだね蓮は」

「うん♪お兄ちゃんは優しいしかっこいいよ」

「憂・・・少しは自重しようよ」

「んっ？」

純は少し顔を引きつらせながら、憂に言った

だけど憂は何がなんだかわかっていないみたいだが

「でも蓮はかっこいいというよりも、カワイイだね」

「そうだね」

二人は他愛も無い事を話しながら蓮を待っていた

数分して蓮が戻ってきた

「どうだった？蓮」

「三人とも2組だったよ」

「やったあ♪お兄ちゃんと同じクラスだ」

憂は顔をほころばせながら

少しルンルン気分で教室に向かっていったその後ろを二人は付いて行った。

「へえ、それじゃ梓ちゃんは軽音部に入るんだ」

「うんっ!!」

1年2組に付いた三人はこんな会話を耳にした

「…軽音部に入りたい人いるんだね…」

「あはは…」

「ははは…」

純の言ったことに苦笑いしかできない平沢兄妹

だがこの会話を聞いた梓と呼ばれていたツインテールの女子は何か頭に猫耳が見えるくらい反応していた

「あの…軽音部のこと、何か知ってるんですか？」

「ああ、この二人のお姉さんが軽音部なの」

梓はそれに反応して

「二人のって事は二人は双子？」

「そうだよ」

梓の問いかけに憂が答えた

「へえ〜っで！？二人のお姉さんはパート何やってるの？」

「ギターだよ」

「すごいっ！」

少し戸惑ってる憂に代わって蓮が答えたが

梓の反応に蓮も少し戸惑った

「私この学校の去年の学園祭のライブの録音聴いたんだけど…」

梓がすごくキラキラとかがやいている

「ギターの人すごくうまくて憧れてたんだ」

もう語尾にハートが付いてそうな勢いで梓は語っている

「きつとここの軽音部ってすごくレベル高いんだろうなあ…」

『すごく美化されてるよお姉ちゃーん』

『すごい美化されちゃってるよ唯ねえー』

梓の反応にシンクロして考えた双子がいた

「そういえば三人とも名前なんて言うの？私の名前は中野梓」

「私は鈴木純、よろしく梓」

「私は平沢憂、よろしくね梓ちゃん」

「僕は憂の双子の兄平沢蓮よろしく中野さん」

「純に憂に蓮君だね。蓮君も梓って呼んで良いよ」

「そう？じゃあ僕のこと蓮って呼び捨てでいいよ梓」

「わかった蓮、よろしくね」

「こちらこそ」

四人はそれぞれ自己紹介をした後に入学式を終え
帰宅した

第二話？ 入学式にいざ出陣！（後書き）

すみませんまた短いです

文才が欲しいですよ

ではライクでしたー

第三話？ 新歓ライブへ突撃するの？（前書き）

遅れてすみません

できる限り週一でしようとは思っていますが

中々難しく

今度からはがんばります

今回は視点が少しぐるぐる変わります
では本編へ

第三話？ 新歓ライブへ突撃するの？

蓮 side

こんにちは平沢蓮です

今僕は憂と一緒に登校しています。ちなみに唯ねえは先に行きました。

今日は新歓ライブがあるので唯ねえは先に行きました

「お兄ちゃんは軽音部に入るんだよね？」

「まあね」

「新歓見に行くんでしょ？」

「うんもちろんだよ」

唯ねえや律さん滯さんムギさんの演奏聴くの久しぶりだし楽しみだよ

学校に着いたなあれは梓？かな

「あっ蓮ー憂ーおはよう」

やっぱり梓だった

「おはよう梓ちゃん」

「おはよう梓」

「今日は新歓だぁ楽しみだね二人とも」

梓はすごく楽しそうだ。軽音部に入って失望しなきゃいいけどね…

「梓ちゃん見に行くんでしょ？せっかくだし一緒に見に行かない？」

「うんいいよ」

梓は憂の誘いを受けて僕らは三人で新歓ライブを見に行くことにした。

梓とはいったんわかれ憂と二人で歩いていた。

「お姉ちゃん今どうしてるんだろうね？」

「たぶん時間的にビラくばりじゃないかな」

朝もそんな感じのこと言ってたし

「あっ憂〜蓮〜」

おっ噂ををすれば何とやらだね

「あっ噂をすれば」

憂も同じ事考えていたんだ。僕たち二人は声がした方に振り向いたがそこにいたのはコアラ？の着ぐるみを着た唯ねえがいた

うわっ！憂が急に僕を引っ張って行くからこけそうになったよ。

唯ねえ置いてきちゃったけど大丈夫かな…少し移動して憂が口を開いた

「ごめんねお兄ちゃん。びっくりしちゃって……」

「大丈夫だよ。さすがにあれを見たらびっくりするだろうし」

あれを見てびっくりしないのは、相当肝が据わっているか

相当鈍いやつだね

「さてとそろそろ、体育館に移動しよっか、お兄ちゃん」

憂にそう言われて携帯を確認したら確かにそろそろだ、梓と合流したいが、どうすれば良いだろ…

「お兄ちゃんどうしたの？」

僕が少し考えていると憂が心配そうに声をかけてきた

「いやさあ、梓とどうやって合流しようかなって考えててさ」

「それなら、体育館の前で待ち合わせてるから大丈夫だよお兄ちゃん。でも後でアドレス交換しといたら？」

いつの間にそんな話をさすがは憂だな。そしてアドレスは交換しておくとか軽音部に入ったときに、便利そうだ。

「そうなのかじゃあ移動するか憂」

「うんっ」

体育館前

梓 side

私は今新歓ライブを見るために体育館へ向かってる

蓮や憂と一緒に見る約束をしてるから、その待ち合わせ場所へ行ってるんだけどね

待ち合わせ場所に行ったら、二人が丁度来た見たい良かった待たせなくて

「お〴〵い二人とも〴〵」

「あっ梓ちゃん」

私の声に二人は気づいて、憂が返事をしてくれた。

「それじゃあ行こうか？」

蓮がそう言って進みだす。私と憂もそれに続いて進みだす。

楽しみだなあ、ライブ

「梓ちゃん嬉しそうだね」

「うんっ」

もちろんだよ。あんな良い演奏してたんだよ、

それを今度は録音じゃなく、生で聴けるんなら嬉しいに決まってるじゃん。

早く始まらないかなあ

「早く始まって欲しいって顔してるね」

「にゃっ／＼／＼」

蓮君に突然そんなこと言われて、恥ずかしかった。

そんなにわかりやすい顔してたかなあ…

「そうだ！梓今のうちに、アドレス交換しない？」

「別に良いよ」

「私もお願い梓ちゃん」

「いいよ別に、赤外線で良いよね？」

二人がアドレスを交換しようといってきた、私も交換したかったから了承して私たちはアドレスを交換した。

もうじきライブが始まるな

梓にはああ言ったけど、僕もすごく楽しみ

「次は軽音楽部による……」

あっもうすぐ始まるな、楽しみだ

「どうも、軽音部です！」

唯ねえがMCか、何か安心して聞いてられるな

「新入生の皆さんご入学おめでとうございます！」

横で梓がすごいうずうずしてる

「私最初軽音部って聞いて、軽い簡単な音楽だなんて思ってたんですよ」

「あはははは」

ある意味すごいな唯ねえ

「カスタネットができればいいかなうなんて軽い気持ちで入部しました！」

それはそれでどうかと思うよ唯ねえ

「なので皆さんもそんな感じで気軽に入部してください！」

てゆーか長くない？唯ねえ

「あつてもカスタネットって実は難しいんだって、さわちゃんが言
ってました。」

流石に律さんが怒りそうだよ。

「あっさわちゃんって言うのは音楽の先生のあだ名なんですけ…い
だっ!!」

「はよ始めんかい！」

とうとう起こってスティックを唯ねえの後頭部に投げつけた。
スコーンって音が聞こえた。

すごいな律さんスティックがきれいに飛んでいったよ

「それじゃスタートッ!!」

ようやく始まったよ、すごいな唯ねえ。

この曲の最初のリフ難しいのに弾けてるよ

………んっ唯ねえ歌忘れてるゝ

あの顔は忘れちゃったって顔だな

あつ滯さんがフォローに入ってくれたから大丈夫そうだ。

梓もすごい見入ってるな

「すごかったね蓮、憂！」

「そうだね梓ちゃん」

梓はすごいテンションがあがってるなあ

「私軽音部に入る」

放課後

さてと軽音部に向かうか：憂はもう帰ったしね

「蓮、憂は？」

「もう帰ったよ。梓軽音部行くんでしょ？一緒に行かない？」

「えっ蓮も軽音部に入るの？」

「うんそうだよ、言ってなかったっけ？」

「言っていないよ！」

あれそうだったけ？あんまきにしてなかったからね

「じゃあ蓮も楽器できるの？」

「まあね一応は」

大してできないんだよね

「梓は楽器何なの？」

「私はギターだよ。蓮は？」

「僕の楽器は……………」

第三話？ 新歓ライブへ突撃するの？（後書き）

どうでしたか？

今回はここで切らせていただきます

ではライクでしたー

第四話？ 入部だが蓮君の発言が…？（前書き）

タイトルの通り蓮君が軽いメタ発言をします
それでもいいという方はどうぞ

第四話？ 入部だが蓮君の発言が…？

漣 side

「うゝゝん…誰も来ないなあ…」

律の言うとおりでれもこないなあ…ライブうまくいったと思ったんだけどなあ

「ライブうまくいったと思ったのに！」

唯も同じ事考えてたのか。

「やっぱり軽音部って人気ないのかな…？」

つつい思っていることを口に出してしまっ

「……………あのーみなさん」

どうしたんだろムギ…

「そんな目で見てたら来るものも来ませんよ？」

んっ確かに入り口でいたら入りにくいよな。

私は律や唯に声をかけて入り口からどいておいた

「こうなったら憂ちゃんを拉致るしか！」

「拉致とか言うな」

まったく律は…

それにそんなことしなくても蓮君が来るだろ

「あのく軽音部ってここですか？入部希望なんですけど…」

「梓そんなおずおずしてないで、入りなよ」

ツインテールのちっちゃいことその後ろから蓮君が入ってきた

「確保ー！」

「ぎゃあーーーーーー」

「こら律何してんだ！」

「律さんストップ！」

律が叫びながら入部希望者に飛びついていった
それを私と蓮君で阻止していた

「蓮くよくやった入部希望者を連れてきたんだな！」

「まあ同じクラスで一緒に行くことになったからなんだけどね」

まあ何にせよ蓮君も含めて二人入ってくれば上々だろ

「ようこそ軽音部へ！」

「ほらこっち座って座って」

「お名前は何て言うの？」

「あ…中野…」

「パートは何やってるの？」

「あ…えつと…」

すごい質問攻めだな…

「誕生日は？」

「血液型は？」

「好きな食べ物は？」

「えつと…あの…」

「落ち着けお前ら」

唯と律が質問攻めにするから、止めた
あっ入部希望者の子が自己紹介を始めた…

時間は少しさかのぼり

蓮と梓が部室へ向かってるとき

蓮 s i d e

梓に僕のパートを教えた後に二人で

部室へ向かっていたのだが

部室の前へ来たときに部室から

「こうなったら憂ちゃんを拉致るしか!」

「拉致とか言うな」

律さんの軽い犯罪発言は聞き流そう。

滯さんは止めてくれるみたいだけど…

それに憂を拉致ら無くても僕は入るって言ってるのに

「はいろっか蓮？」

「そうだね」

梓に声をかけられ我に帰った僕は、梓と一緒に部室へと入ろうとしたが

梓が入りにくそうにしている。

「あのゝ軽音部ってここですか？入部希望なんですけど…」

「梓そんなおずおずしてないで、入りなよ」

すごく遠慮がちでいる梓に声をかけた。

「確保ー！」

「ぎゃあー……」

「こら律何してんだ！」

「律さんストップ！」

梓に飛び掛ってく律さんを潑さんと一緒に止める。

「蓮よくやった入部希望者を連れてきたんだな！」

連れて来たとゆうかなんとゆうか

「まあ同じクラスで一緒に行くことになったからなんだけどね」

とりあえずわかりやすいように、説明する。

「ようこそ軽音部へ！」

「ほらこっち座って座って」

「お名前は何て言うの？」

「あ…中野…」

「パートは何やってるの？」

「あ…えつと…」

律さんや唯ねえの質問攻めにあってるよ

「誕生日は？」

「血液型は？」

「好きな食べ物？」

「えつと…あの…」

「落ち着けお前ら」

その質問攻めにあっているのを見かねたのか、滯さんが止めに入った
そして梓が自己紹介を始めた

「えつと1年2組の中野梓なかのあずさといいます。パートはギターを少し…」

「おっ唯と一緒にだな！」

「よろしくお願いします唯先輩」

『唯…先輩…』

唯ねえ帰って来て

「おい帰って来い」

「とりあえず何か弾いて見せて。はいギター」

「まだ初心者なので下手ですけど…」

あのギター女の子には少し重いと思うけど…

「大丈夫！私が教えてあげるから！」

「おっ早くも先輩風吹かせてるな！」

唯ねえ胸をポンツとたたいて大見得張るのは良いけど
大丈夫なの？

「それじゃあ…」

ジャララアンと梓が唯ねえのギターで弾くがかなりうまい

『う…うまい…！』

「私より断然」

やっぱりね大丈夫かな唯ねえ
そしてこの静かな空気は何？

「あ…あれ？」

『どうしよう何だか変な雰囲気…やっぱり私の演奏が聞き苦しか

ったから…』

梓の上手さにみんな絶句するから梓が不安そうにしてる…

「ごめんなさいやっぱり聞き苦しかったですよね…」

「あっいやそういうわけじゃ…」

梓の言葉にフォローを入れる滯さん

「ま、まだまだだね！」

『『『えーっ！っ！？』』』

ちよっ唯ねえ見え張りすぎだよ

今何か滯さんや律さんと思考がシンクロしたきがするよ…

「おいついつまで見え張ってんだよ」

律さんが唯ねえにこそこそといってる。

「私もう一度唯先輩のギター聞きたいです！」

「えーっ!？」

「あーっ！ーっ！…えーっ！と…」

「ライブでぎっくり腰になったからまた今度ね！」

『苦しい…』

苦しいよ唯ねえ

「もう良いからどいてろ」

「あーん」

何か二人の行動がコントみたいだ…

「とっとにかく入部してくれるってことでいいんだよね？」

「はい！」

元気な返事だな、大丈夫かな…

「新歓ライブの皆さんの演奏を聞いて感動しました！これからよろしくお願いします」

「うう…まぶしすぎて直視できません…」

確かにまぶしいね

「それじゃ入部届け受け取ったから明日からよろしくね！」

「はいっ！それじゃ失礼します」

「バイバーイ梓」

久しぶりにしゃべった気がするよ…

「あっそういえば蓮、蓮の演奏も聞きたい…」

「ごめん僕は自分の楽器じゃ無いと弾けないんだ…」

「そうなんだ…じゃあ明日聞かせてね！」

「うんわかった」

梓が残念そうな顔をしてたけど、自分の楽器じゃ無いと弾けないのはホントだし
作者が必死に隠そうとがんばってるしね。

「それじゃあ今度こそ失礼します」

そういいながら梓は帰っていった

「わ…私どうしよう…」

「「練習しとけ」」

唯ねえの言葉に滯さんと律さんの二人が言い放った
僕は少しして梓と一緒に帰ればよかったかなとか
考えながら家へと帰った

第四話？ 入部だが蓮君の発言が…？（後書き）

ラ「皆さんライクです」

蓮「あれなんで、僕がここにいるんだ？」

ラ「暇だし、寂しいから、そして君に文句を言うために呼びました」

蓮「とりあえず呼んでもらえたのはいいとして、文句！」

ラ「そうだよ、僕に対するメタ発言をしたでしょ！」

蓮「お前が言わせたんだろ！」

ラ「…：そんなのしるかっ！」

蓮「うわっ最低だ…そして今の間は何だ！」

ラ「友達から何でそんないいとこで切るんだよっと言う、僕にとつての褒め言葉を頂きました」

蓮「もう良いよ消えろバカ作者」

ラ「なっ！バカとは何だバカとは！」

蓮「バカだから、バカって言ったただだよ。では蓮でしたー」

ラ「あっ僕のせりふ取るなよーではラi「では皆さんさようならー」お前はー」

第五話? とうとう楽器が・・・? (前書き)

長らく待たせてすみませんでしたー
今後はもう少しがんばりますので
見離さないでください

では本編へ

第五話?　とうとう楽器が・・・?

翌日の放課後

蓮 side

放課後かあ僕は荷物を持ちギターを担いだ

ちなみに僕のギターはストラトキヤスターだ

カラーはSBだ
サンバースト

作者ががんばっている? 知るか!

「蓮軽音部行こ!」

元気だなあ梓は

「そうだね一緒に行こうか」

梓に誘われて一緒に行く事になった。

クラス一緒だしどちらにせよ一緒に行っただろ

梓の二人とも準備ができた為

「じゃあいこうか梓」

梓に声をかけ僕らは出発した。

部室へ着いた僕ら

梓はドアを開けた昨日みたいにおずおずせず
普通に開けた

「こんにちはーっ！」

元気いっぱいだなあ梓

「おっ元気いっぱいだな」

「はいっ放課後が待ち遠しかったです！」

まあ授業中もすごくウキウキしてたもんね

「それじゃさっそく…」

『さっそく練習するのね』

梓の考えてるのは違うな、某不幸青年の台詞を借りるなら
まずは——その幻想をぶち壊す！

梓が考えてるのは練習だろうが多分お茶でしょ
ムギさんのお茶おいしんだよね。後お菓子も

「お茶にするか」

「梓ちゃんと、蓮君もどうぞ」

『えーっ!?!』

やっぱりか、おつまギさんがお茶を進めてくれてる
お言葉に甘えて僕もいただくとするか

「ありがとうございますムギさん」

「ちょっ！蓮も何普通に飲んでるのー！？」

気にしたら負けだよ梓

「あ…あの部室でこんなことして大丈夫なんですか？」

僕に何を言っても無理だと悟った梓は
律さんに聞いていた。

それに対して律さんは「大丈夫、大丈夫！」って答えていると
さわこ先生が入ってきた

「あ！」

「わっ！先生が…」

梓も先生が来たことに気付いた。

「あ…あのこれは…」

スタスタ歩いてくるさわこ先生に対して
梓は言い訳を述べようとするが

先生は気にも止めず席について一言

「私ミルクティーね！」

『ええーっ!?!?』

ムギさんは返事をしてミルクティーを淹れた
そして僕や梓に気付いたようで

「蓮君とこの子が新入部員?」

「そうだよー」

元気に答える唯ねえ

「顧問の山中さわこです。よろしくね」

「よつよろしくお願いします」

さわこ先生の挨拶に
梓が答える

さわこ先生が梓をじーつと見つめる

『綺麗な人だなあ』

『猫耳とか似合いそうね。蓮君にはメイド服フッフ…』

ゾクッ……何か今悪寒が……

気のせいだと信じよう
うん

それからしばらくティータイムをたのしんでいる。

『ここ軽音部だね?』

梓の考えてることがなんとなくわかるや

『はっ!もしかして私の自主性が試されているのかな?』

「それじゃさっそく…」

そう言うがいなや梓はギターを出して弾きだした。

それに対してさわこ先生が、

「うるさーいっ!!」

「ええーっ!?!」

「ああ……」

先生の台詞に梓は少し涙目になっていた

「さわちゃんのあほー!!」

「だって静かにお茶したかったんだもん……」

「言い方ってもんがあるだろ」

律さんの言葉に被害者ぶるさわこ先生

「ごめんなあの先生ちょっと変なの」

「おいっ」

「気にしないでね」

「さっケーキ食べよう」

「ティータイムがうちのうりだから」

「梓別に間違っでは無いと思う・・・」

滯さんとムギさんのフォローに便乗して

僕も少しフォローをいれる

ただし唯ねえと律さんのはフォローじゃない気がする

「梓ちゃん？」

しゃがみこんだまま何もいわない梓を心配したのか

ムギさんが梓を呼びかけた

そして・・・

「こんなんじゃないですー！！！！」

「うおっ！切れた！」

梓が切れた・・・

「皆さんやる気が感じられないですっ！蓮だって何なの！それ！？」

「いやぁ・・・新歓終わった後だし」

「僕はこんなとこだと知って入ったし・・・」

「そんなの関係ありません!!」

だよね・・・梓の言う事も間違っていないんだよね

「音楽室を私物化するのもよくないと思います！
ティーセットはすべて撤去するべきです！」

「それだけは勘弁して」

梓の言葉にムギさんがちよつと涙目になったが
先生の反応は異常だと思う

「なんで先生が言うんですか!？」

「まあとにかく落ち着いて」

「これが落ち着いていられますか！」

落ち着くことはできると思うけどなあ
よしっこうなったら・・・

「いいいいいい」

「よしよし」

唯ねえが後ろから抱きついて頭を撫でて
僕は前から梓の頭を撫でた。

「そんなんじゃ収まるはず・・・」

おおめっちゃ和んでる

こうゆうのかわいいなあ・・・っは

「っっておさまったあ!!」

「取り乱してすいませんでした」

梓は悪くない気が・・・そしてどうせ気にしてないだろうし

「ううん全然気にしてないから」

やっぱりね

「えっ!それはそれで・・・」

「梓の言う事も一理あるよ。私たちも、もっとやる気出していかないと、わかりましたね?」

「はい……」

澤さん流石だね。でも、返事したのは唯ねえだけだ

数日後

梓は教室でため息をついていた

多分この前のことを気にしているんだろ

「梓部活いこ？」

「この前迷惑かけたから行きにくいんだよ」

「多分全然動じてないと思う」

「えっそれはそれでちょっと……とゆうか蓮もだよ！

ちゃんと練習しなきゃ、蓮のギター聴いてみたいよ」

「練習は皆さんがするときには普通にするよ？」

まああそこはすることじたいが稀だけどね

「はあ」

僕と梓は部屋へと歩いていつている

「梓そこまで落ち込まなくても・・・」

「うん・・・」

中々きつい空気のまま部屋に着いた僕たち

「こんにちは・・・」

梓が扉を開けたら中でわいわい騒ぐ皆さん

『蓮の言ったとおり全然動じてない』

梓が来たことに気づくと沈黙し

梓がジト目で見ていたら「これから練習するところだったんだよ」と
言い訳のようにギターを持って練習する唯ねえ

「ケーキ食べないと元気でない・・・」

「はい、唯ちゃん」

ペタツと床に座り込む唯ねえにケーキをたべさせるムギさん
そしたらすごく上手くギターを弾く唯ねえ

「うっうんまーい」

梓もびっくりしてるみたい

「梓ちゃんも食べてみなよ・・・おいしいよ?」

そういいながら近寄る唯ねえ

「あーん」

ちかづく唯ねえに対してたじろぐ梓

「ほれ」

「あむっ」

とうとう食べちゃった梓

「あっおいし・・・」

「んっ?なんだってえ?」

梓がこぼした言葉を聞き返す律さん

「おっ惜しいって言ったんです!」

「ほほーう」

「うーん気に入らなかったかあ」

唯ねえの言葉に物欲しそうな目で見ている梓

「ほい」

唯ねえが差し出すと

梓の顔がパァーっと明るくなる

逆に引くとズーンと暗くなる

唯ねえは面白がって

何度も繰り返す

『おもしろい』

「みんな練習頑張ってる？」

お茶しているとさわこせんせいが入ってきた

「って食べてるじゃん！」

先生はケーキをパクツと食べ

「もう私ここで死んでもいい……」

「死ぬな」

涙を流しながら言う先生に律さんが突っ込む

「でもなんでティーセット撤去しなかったの？」

ふと疑問に思ったのか梓にそんなことを尋ねる先生

「何でもかんでも否定するのはよくないと思って・・・」

「へー」

『どっちが教師なんだか』

「梓ちゃんっていつギターを始めたの？」

「えっと小4くらいからです」

「親がジャズバンドやってたのでその影響で・・・」

「すげーサラブレッドだ！」

凄いな梓は

「唯先輩と蓮がギターを始めたきっかけて何ですか？」

「えっ私!？」

『言えない…軽音が軽〜い感じの音楽だと思ってたなんて言えない』

「僕は唯ねえが始めるときに誘われて、僕も始めたんだ」

「そうなんだ」

「そうそう！私梓ちゃんと蓮君にプレゼント持ってきたの」

いやな予感……が意外としないなんでだろ……

「はいっ」

「…あの…これ何ですか？」

先生が出したのは猫耳と……

第五話?　とうとう楽器が・・・? (後書き)

蓮&憂「あれなんでここに?そして作者は?」

ピラピラ↑紙の落ちてくる音

蓮「何々『二人にまk』ビリッさて先に進もうか憂」

憂「そうだね、じゃあ軽い次回予告でも」

蓮「次回予告?」

憂「うんお兄ちゃんの意外な一面が見られるらしいよ」

蓮「意外な一面?」

憂「うんそうだよ、楽しみだね」

蓮「まあいいかそれでは皆さん・・・んっまた紙だ」

『皆さん次回も読んでくれるとうれしいです。ではr』ビリッ

蓮「では平沢蓮&」

憂「平沢憂の」

蓮&憂「平沢兄妹でしたー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5262u/>

平沢三姉妹？？いや兄妹か姉妹(きょうだい)？

2011年8月7日13時44分発行